

## パネル

道を語っている、ということが確認できる。それらは主に、A 様々な現実に対する理想主義的価値観としての武士道、B 西欧的価値観に対する武士道、C 近代主義に対する武士道、D 「愛至上主義」に対する武士道（愛に対する義を強調）、E1（理想的な）日本の世俗的道德としての武士道、E2 キリスト教に対する世俗の価値観としての武士道（あくまでも武士道が「人間同士の価値観」にすぎないものであることが示され、信仰の立場からの対象化がなされる）、E3 武士道批判、等である。

内村は武士道の特徴として、正直、高潔、寛大、約束を守ること、借金しないこと、逃げる敵を追わないこと、人が窮地に陥っているのを見て喜ばないこと、等を挙げている。これらは、いずれもパウロが書簡においてキリスト者たちに訴えかけているのと同様な徳目であって、特に武士道に固有の徳目、というものではないように思われる。武士道に戦闘職、ということ意識しているものではない。よって、内村の考える、台木としての武士道が、人間関係を良好に保つ上での一般的な道徳性以上の特別なものではないことが、明らかに言ったと言えるであろう。少なくとも、日本的固有性ということを、改めてそこから取り出すことは困難であるように思われる。

内村が一方で「平民」という言い方を多くしていることも、見逃してはいけない。内村の平民観においては、労働、自然、平和がその特徴とされる。彼は、キリスト教は平民的宗教であるとも述べている。すなわち、貴族的・階級的でない、ということである。神殿批判・司祭批判という要素がユダヤ・キリスト教に含まれていることを考えれば、内村の主張は間違っている

いないであろう。

内村が「武士的」ということを重視したのは間違いないことである。しかしその武士的であるという内容が、他の伝統文化と共通するような徳目・道徳性を含むこと、さらに武士というものを独立した人間と捉え、貴族性との違いを強調していることを押さえた上で、その「武士道」ということを評価すべきではないか。さらに、その「武士道」が特別な「日本らしさ」、「日本の固有性」といったことにこだわったものではない、ということは、もっと積極的に考えてもいいのではないであろうか。

## 『武士道』にみる比較の言説

東馬場 郁生

新渡戸稲造による『武士道』(Bushido) に関して、研究者はしばしば、新渡戸自身によるキリスト教的理解や意味付け、あるいは歴史的「武士道」からの変容を指摘する。しかし、その「変容した」武士道が、同書において実際どのような形成されているか分析したものはあまりない。本発表では、『武士道』における比較の言説に改めて注目し、新渡戸の武士道の形成過程を考察する。

比較については、近年、比較を行う研究者自身の立場や関心が注目されている。比較を支える論理的前提や、研究者自身の

政治的関心や宗教的立場が問われているのだ。さらに研究者の創造性と想像力が強調される。比較における類似と差異は所与のものではなく、研究者個人の知的操作であるという。従来の比較法では類似の発見が主流だが、類似があくまで研究者の頭の中で知的作業として導かれる以上、それは実は「発見された」ものではなく、研究者によって「発見されたもの」に他ならないと主張されている。

上記の比較論を背景に、『武士道』において比較がどのように行われ、いかなる役割を果たしているか見てみよう。『武士道』では、新渡戸自身の大変明確な目的をもって比較が行われている。「並行例をあげれば、問題を外国人読者にいつそうわかりやすくする助けになろう、と思ったからである」(佐藤全弘訳二八―二九頁)と、新渡戸にとって比較とは、武士道を外国人読者、具体的には西洋人にわかりやすく説明するためであった。

しかし彼は、それ以上に、比較が西洋の読者に対して武士道を語る唯一の方法だと考えていたとも思われる。彼は、比較の対象を西洋文化に見いだせないという理由で「孝」の追加を断念しているからだ。この点からすれば、新渡戸にとって、比較とは単なる理解の補助という役割をはるかに超えた、説明そのものとさえ言えるかもしれない。このようにして彼は、比較を通して武士道について語っていくのだ。

さて、『武士道』では、十五章までと残りの二章の間には主張の意図に隔たりがあると思われる。武士道の説明が執筆の目的ならば、十五章「武士道の影響」まで語ること十分だ

と感じられるからだ。続く十六、十七章では、武士道を自らのキリスト教信仰とつなぐ主張が多い。比較により描かれた武士道が、一棹大きなキリスト教の護教論的言説の中に組み入れられ、キリスト教の優越性とともに意味づけられる。この部分は、同書が武士道の話で完結すると予想する読者には、当初の目的から逸脱したように思え、一方キリスト教と新渡戸の描く武士道の関係に関心をもつ研究者は、「これこそが同書執筆の真の目的」という。

しかし、比較を通して全体を眺めれば、異質とも思われる最後の二章が、先行する他の章としっかりと連結していることは明らかだ。新渡戸は、十六章で「その性格特性のどの一つとして、武士道の独占的遺産ではない」(二二四頁)と、それまでの比較の結果について述べているからである。こうして『武士道』における比較は、ただ武士道の説明のためだけではなく、武士道の独自性を否定するためにも使われた。そして、その目的は、武士道を包含する普遍的真理としてのキリスト教とのつながりを示すことであり、さらにはキリスト教の道德体系としての優位性を語ることにほかならない。

西洋の道德観や美德と類似した武士道の提示は、先に紹介した比較論によるならば、新渡戸が自らの創造性と想像力を発揮して(発見ではなく)「発見」した武士道ということになる。新渡戸の武士道は、彼の比較の言説によって、新しく作り出されたと言えるのだ。それが歴史的武士道と異なるのは当然であろう。